

大津 歴博 だより

2002
No.48

企画展

大津の小学校

—130年のあゆみ—

10月5日(土)~11月10日(日)



青い目の人形（平野小学校蔵）
昭和2年（1927）、日米親善
使節としてアメリカから贈られ
た人形。県下で現存するのは、
平野小学校と甲南町立第二小
学校の2体のみ。



大津市歴史博物館

大津の小学校

—130年のあゆみ—

明治五年（一八七二）に発布された「学制」をうけて、明治初期、大津市内各地に次々と小学校が誕生しました。本年はそれから数えて百三十年目にあたります。この間小学校は、地域の子どもたちを育む教育機関として大きな役割を果たし、現在もその歩みが続いています。

本展では、地域と学校が歩んできた足跡を伝える資料や子どもたちの様子を記録した写真等を、各小学校に残された資料によって紹介します。また、小学校教育の変遷を各時代の教科書等で紹介します。

このほか、地域の人々が子どもたちの勉強に役立つようにと、小学校に寄贈された資料も多数残されており、学校によっては「郷土資料室」といった形で整理されています。その一部もあわせて紹介します。

★企画展の小学校の展示構成

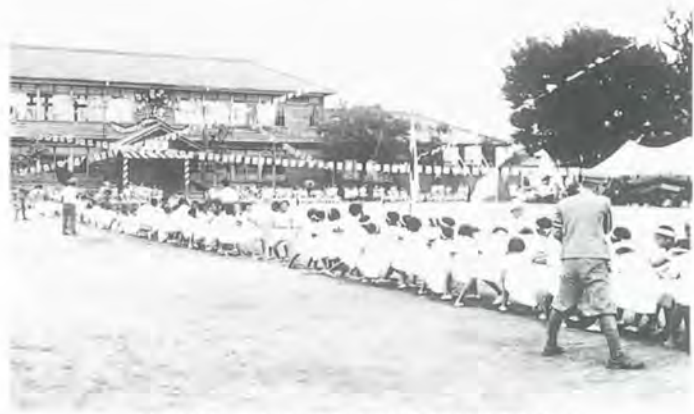
○小学校の誕生

明治初期の学校は、地域の人々の努力で設立

されました。明治五年、今堅田村の致道学校、上坂本の八木山の至明学校が作られたのをはじめ、次々と市内に小学校が誕生します。ここで



明治42年西尋常高等小学校卒業写真
長等小学校蔵

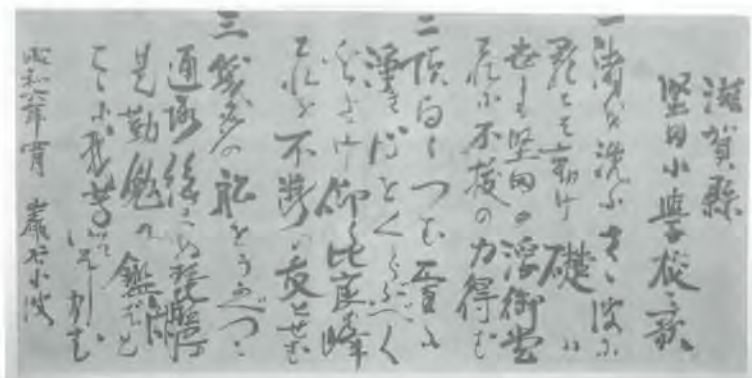


昭和初期、堅田尋常高等小学校の運動会
堅田小学校蔵

は学校設立の背景や当時の学校の様子を語る資料を紹介します。

○尋常小学校の時代

各小学校は、明治二三年（一八九〇）の小学校令の改正によって尋常小学校と呼ばれるようになり、就学率も高まってきました。明治後期には、運動会や修学旅行といった学校行事も活発になり、現在の小学校に近い姿になってきます。



堅田尋常高等小学校（小波作詩揮毫） 堅田小学校蔵
 厳谷小波（1870～1933）は、近代に活躍した水口出身の児童文学者。小波は琵琶湖にちなむ筆名で、本命は季雄。昭和6年堅田小学校の校歌を作詩して自ら揮毫した。

○国民学校の時代
 昭和一六年の国民学校令により小学校は、国民学校と呼ばれるようになります。第二次世界大戦下の切迫した状況を反映して、学校生活も軍事色に染まっていきました。

○戦後の民主化教育
 戦後、教育の民主化が進みます。戦中使われ



昭和19年瀬田国民学校児童の絵日記 個人蔵

ていた教科書のうち、軍国主義的と考えられた部分を墨で塗って抹消した「墨塗り教科書」が使われたのもこの時代です。昭和二二年一月には中央国民学校（中央小学校）が近畿新教育実験学校に指定され新制小学校のモデルスクールとなりました。新しい時代の小学校の姿を紹介します。

○学校の郷土資料室

市内のいくつかの学校には、地域から集められた資料を展示する「郷土資料室」が設けられています。かつての生活を伝える懐かしい道具や学区から発掘された考古遺物等が収蔵されており、その一部を紹介します。



昭和28年堅田小学校児童の公安部が交通安全に協力
 堅田小学校蔵

★観覧料

一般 四〇〇円（三二〇円）

高・大生 三〇〇円（二四〇円）

※（ ）内は一五名以上の団体、前売り、市内在住の六五歳以上の方・障害者の方の割引料金

※小中学生は無料

★休館日 一〇月七日、十五日、二十一日、二十八日、十一月五日

第28回「三」企画展

大津の仏教文化3 石山寺の新発見資料

■ 11月12日(火)～12月26日(木)

このシリーズでは、大津市内に伝わる豊かな仏教文化の一端を毎回紹介しています。

今回は、石山寺の奈良時代の開基当初に造立された塑像本尊や脇侍の遺物(新発見のものを含む断片や、脇侍金剛蔵王の心木)を中心に、他像の塑像断片や江戸時代に本尊が開扉された時の古文書、そして『石山要記』等の寺誌史料など、未公開のものを含め、石山寺本尊に関連する資料を展示する予定です。

「お知らせ」

石山寺御本尊木造如意輪観音半跏像(重要文化財)がただ今御開扉中です。通常は三十三年に一度しか御開扉されない秘仏ですが、今年は開基一二五〇年にあたり、特別に間近で拝むことが出来ます。本展とあわせ、是非とも参拝されることをお勧めいたします。

12月16日(月)まで。



塑像断片(臂釧か) 奈良時代 石山寺蔵

第29回「三」企画展

江戸時代の古文書2 大津百艘船

■ 平成15年1月7日(火)～3月9日(日)

豊臣秀吉の命により、大津城主浅野長吉は、大津を琵琶湖水運の拠点とするため、天正十五年(一五八七)頃、大津を中心に坂本・堅田・木浜(守山市)などの諸浦の船持ちを集めて「大津百艘船」の船仲間を組織し、湖上交通の特権を与えました。この制度は、江戸時代にも受け継がれ、大津百艘船は湖上水運に重要な役割を果たすことになりました。

本展では、歴代の大津城主や大津代官が発給した大津百艘船の保護を定めた高札や関連の古文書・絵図等により、琵琶湖の湖上水運の盛衰を紹介します。



大津百艘船由緒書 個人蔵

本邦真のノートから

岩間寺の脇侍について

大津市南郊にある岩間山正法寺(通称岩間寺)は、奈良時代の養老六年(七二二)に元正天皇の発願、「越の泰澄」の開基という伝承を持つ山岳寺院です。場所柄、南都(奈良)や醍醐との関係が深く、西国観音巡礼第十二番の札所でもあります。この本尊は金銅仏の千手観音立像(秘仏)で、寺伝では、越の泰澄が山内のカツラの霊木で千手観音を刻み、元正天皇の念持仏である金銅仏のこの本尊を胎内に納めたといわれます(この木造千手観音は現存せず)。今回注目するのは、その脇侍として安置されている婆藪仙人立像と吉祥天大弁功德天立像です。ともに等身やや小さく、カツラかと思われる一木造の堂々たるお像です。通常、千手観音の眷属としては二十八部衆と風神・雷神が有名で、この二体もその中に含まれます。しかし、この二体のみで三尊を形成するスタイルは、絵画では東京国立博物館本(国宝)等、若干見られるものの、彫刻で、しかも中世にまで遡る遺例は殆ど知られていません。このスタイルは中国の唐時

代(七〜八世紀)に流行していたようで、奈良時代の開基伝承を持つ岩間寺のこの本尊に何らかの影響があったと想像すると、夢のある話になります。本像が中世の一般的な造像である寄木造で合理的に製作するのではなく、ある意味無理やり一木造(婆藪仙人は右腕も共木)で彫像しているところも、古像の存在を想像させます。

今回話題に出した脇侍は、「中世も後期ぐらいの、昔二十八部衆として二十八体あったものが、偶然二体だけ残ったもの」として、いままで本尊の脇に、特に注目を浴びることも無くひっそりと安置されてきました。しかし、中世(十四世紀か)の一木造の彫像として大変立派な像(後補も殆ど無い)であり、しかも確証はないものの「千手三尊」という彫刻では極めて希な例である可能性があるということは大いに注目されていると思います。今後、他の遺例の発見や岩間寺に関する史料探索などにより、この秘密の解明が行われることを期待したいものです。(寺島典人)



木造吉祥天立像 一軀



木造婆藪仙人立像 一軀

収蔵品紹介

41

大津市指定文化財

石山寺知足庵コレクション 二十六点・一冊

石山寺蔵 本館保管
古瓦 白鳳〜江戸時代
古瓦譜 寛政年間(江戸時代)

ます。

近江や山城に関する限り、これら出土した場所を示した瓦と、近年の発掘で実際に発見されている瓦と比較してもそれほど矛盾はありません。ただし、『古瓦譜』では、石山寺出土とされる瓦を中心に、縦じ目から数センチのところまで本紙を切り取り、後ろから現在の拓本を貼り付けるといふ加工がなされており、最後の七紙から三紙までは、

ります。

しかしながら、この古瓦と『古瓦譜』は、江戸時代の中頃に藤原貞幹によって代表される古瓦の収集や図録の作成に連なるもので、博物学の本内石亭や松平定信とも交流のあった尊賢僧正の手になるという点からも、日本の考古学史上、大変貴重な資料といふことができます。

伝石山寺出土軒丸瓦と『古瓦譜』

(寺島典人)

石山寺には、特製の木箱に納められた江戸時代以前に遡る古瓦が四〇点云々残っています。これらの古瓦の多くは、江戸時代の寛政年間に石山寺の上臈をつとめた尊賢僧正(号、知足庵)の収集になるものです。僧正は遺物に興味を持ち、寛政九年(一七九七)から同十一年にかけて収集した古瓦の拓本をまとめて『古瓦譜』と題した一書を編みました。『古瓦譜』には、石山寺・園城寺・近江国分寺・駒坂寺・滋賀旧都などの出土場所と、簡潔な来歴が注記されています。『古瓦譜』に拓本が載る瓦は、近江・山城(京都府)を中心に、東は尾張、西は大宰府・琉球にまで及んでいます。そのなかで、現在石山寺に残る瓦と一致するものは二六点を数えます。来歴には入手した日時と相手などを記し、瓦の名称は「頭瓦(軒丸瓦)・「檐磚瓦(軒平瓦)」など、形状にあわせて独自の命名を行っています。拓本は墨拓が殆どですが、「紫褐色瓦」と注記された「近江紫香染旧都」の瓦は褐色で、「山背仁和寺円堂緑瓦」は緑色で拓本がとられており、実物にあわせて拓本の色を変えろという工夫がなされてい

切り取ったままの状態に残されています。また、『古瓦譜』に記された文字には複数人の筆跡が認められ、これが同時に記されたものか、後に加筆されたものかも今後の検討課題です。さらに、石山寺出土とされる軒丸瓦は、現在のところ南滋賀町廃寺(大津市)のみから同範瓦が出土しており、その出土場所・日時の注記が曖昧であるという点とをあわせて、出土地に問題が残



大津歴博だより No.48
平成14年9月20日

大津市歴史博物館

〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>

R100